

34) 気圧と虫垂炎

福田 稔・渡辺 和男 (県立坂町病院外科)
秋山 俊彦 (同 検査科)

平成4年2月より気圧と虫垂炎の関係を調査してきたが、一般に低気圧の時に虫垂炎は多く発生するが、高気圧の時に発生する虫垂炎は壊疽性、穿孔性の虫垂炎が多い事が判明した。また癒着性腸閉塞症も低気圧時に多く発生する事が明らかになったが、平成5年9月迄のデータをまとめて報告する。

35) 脊椎麻酔後の頭痛 (postspinal headache)
は回避可能か?

川口 英弘・大川 彰 (巻町国民健康保険)
病院外科

【目的】脊椎麻酔の合併症の1つに頭痛 (postspinal headache) があり、症例の1~20%に発現し術後4~10日間続くが、硬膜穿孔からの脳脊髄液の漏出が原因とされている。今回、われわれはこの頭痛の合併率低下を目的に検討したので報告する。【対象】脊椎麻酔を施行した229例を対象とし、前期28例と後期201例で比較した。【方法】前期は21Gの穿刺針を用いて硬膜線維の走行を考慮せずに挿入し、外筒を回転させて脳脊髄液の流出を確認した。後期は23Gの針を使用して針の切り口を硬膜線維と平行に挿入し、外筒を回転させないこととした。【結果】1週間前後継続する頭痛は前期の3例のみで後期には経験しなかった ($p=0.0002$)。軽度な頭痛、吐気、頭のふらつき感を訴える症例を含めても、後期には2例のみであった ($p=0.0091$)。【結論】細径な穿刺針を用い硬膜線維の断裂を避けることで頭痛の合併率を低下させることが可能であることを再確認した。

36) 直腸平滑筋腫の1例

鈴木 俊繁・青野 高志
新国 恵也・吉川 時弘 (新潟県厚生連中央)
佐々木公一 (総合病院外科)

我々は比較的稀な直腸平滑筋腫の1例を経験したので報告する。症例は65歳女性。子宮癌検診にて骨盤腔内腫瘍を指摘され精査目的に紹介された。他覚所見、画像より直腸平滑筋腫と診断。径6cmの大きさから悪性の可能性も否定出来ず、癌に準じて低位前方切除術を施行した。病理診断は直腸平滑筋腫 (中等度悪性) であった。本疾患は良悪性の鑑別が非常に困難であり、悪性疑診例、

例えば全身症状を呈したものの、径4cm以上のもの、潰瘍形成の見られるもの、隣接臓器に浸潤の明らかなもの等では正常組織を含めた積極的な切除をすべきである。また組織学的に良性と診断されても術後遠隔期に血行性転移を来した症例が報告されていることから長期に渡る慎重な経過観察が必要である。

37) 当科における術後 MRSA 感染症の検討

鹿嶋 雄治・佐藤練一郎
鈴木 聡・山崎 俊幸 (秋田組合総合病院)
堀川 直樹 (外科)

1992年1月から1993年10月までの当科における術後 MRSA 感染症例の検討を行った。この期間の全身麻酔下手術症例は473例で、うち30例、6.3%に MRSA 感染症が発症した。肺炎が14例、46.7%と最も多く、ついで腸炎の10例であった。死亡例は肺炎による5例で、いずれも術後の合併症に引き続いて肺炎を併発した症例であった。腸炎の10例中、8例は胃切除後などで消化管内が低酸、無酸状態の症例であった。院内感染対策はもちろんであるが、腸炎の予防には術後の抗菌剤の選択に加え、消化管内の酸度を保つこと、肺炎の予防には、術後の合併症を防止することが重要な因子と考えられた。

38) 高カロリー輸液を併施した胃癌術後化学療法施行中に発症した Wernicke 脳症の1例

香山 誠司・佐藤 信昭
小山 諭・親松 学
酒井 靖夫・小山俊太郎
伊達 和俊・田宮 洋一
畠山 勝義 (新潟大学第一外科)
遠藤耕太郎・田中 正美 (新潟大学脳研究所)
辻 省次 (神経内科)

高カロリー輸液を併施した胃癌術後化学療法施行中に発症した Wernicke 脳症を経験したので報告する。症例は57歳女性。1993年2月25日胃体上中部の Borrmann 4型胃癌にて胃全摘術兼脾臓合併切除術+拡大リンパ節郭清が施行された。組織型は por, 深達度 se, 高度なリンパ節転移, 静脈侵襲, リンパ管侵襲が認められ、術中の腹腔内洗浄細胞診にて悪性細胞陽性であったので、5FU 1,000 mg * 5日間, CDDP 100 mg * 1日の化学療法が施行された。著明な食欲不振に対して高カロリー輸液が行われたが、開始後1ヶ月頃より意識障害、眼球運動障害、眼振等が出現した。血清ビタミン B1 値の低下、頭部 MRI の特徴的な所見より Wernicke 脳症と診断

された。ビタミン B1 の経静脈的大量投与により上記症状は速やかに改善した。術後の化学療法時の悪心、嘔吐などの消化器症状に対して高カロリー輸液を併用する際にはビタミン、微量元素などの栄養素補充に対する注意が必要である。

39) 5-FU 投与が原因と考えられた白質脳症の1例

山口 修・千田 匡 (立川総合病院外科)
植木 秀任 (同 脳外科)
福田 光典・小林 勉 (新潟大学第一外科)
山洞 典正 (新潟大学脳研究所)
小柳 清光 (神経病理)

症例は56歳女性。1991年2月20日左乳癌にて非定型的乳房切断術 (Auchincloss 法) を施行。92年12月17日胸部レ線にて多発性肺転移みられたため93年1月12日より3月7日にかけて CAF 療法2クール (総投与量 5-FU 2,000 mg ADM 100 mg EDX 2,800 mg) 施行。3月16日突然の意識レベルの低下、全身痙攣発作発症。脳 CT, MRI にて大脳白質後頭葉に変性を疑う広範な病変を認めた。生検し得た神経病理学的診断では白質脳症であった。髄液検査では異常所見は認められなかった。その後保存的療法にて症状軽快37日後の脳 CT でも陰影の消失が認められた。原因として 5-FU 投与の影響が強く疑われた。

40) 薬剤による間質性肺炎を呈した2例

丸田 智章・三科 武
石原 良・阿部 和男
藤島 丈・加藤 知邦 (鶴岡市立荘内病院)
大谷 哲士・斉藤 博 (外科)

カルバペネム系薬剤によると思われる間質性肺炎を呈した2例を報告いたします。

【症例1】81歳、女性。盲腸癌と診断され、右半結腸切除術を施行された。9病日より微熱、呼吸困難出現し、肺炎を疑われ、チエナムを投与開始された。投与開始後4日目より間質性肺炎像を呈し、徐々に増強、人工呼吸管理、ステロイド剤投与が施行されたが、呼吸状態は改善されず、死亡した。

【症例2】64歳、男性。直腸癌の診断で、低位前方切除術を施行された。9病日に腹壁離開し、手術施行され、同日よりチエナムを投与開始された。投与開始後4日目より間質性肺炎像が出現し、徐々に増強、呼吸困難強く、

人工呼吸管理を行い、ステロイド剤投与を行った。肺炎像は改善され、原疾患も経過良好にて、退院した。薬剤感受性試験 (DLST) を投与した数剤に行ったところ、チエナムのみに反応が認められ、チエナムによる間質性肺炎が考えられた。

41) S状結腸癌術後の腎後性急性腎不全に対し手術、制ガン剤で積極的に加療した1例

宗岡 克樹・佐藤 攻 (信楽園病院外科)
清水 武昭

腸閉塞で発症したS状結腸癌の1症例に Hartmann 手術を施行、10カ月後の人工肛門閉鎖術の際に Schnitzler 転移を認め切除した。術後26カ月目に腹膜播種、小児頭大腫瘍による腎後性急性腎不全となり、経皮的腎瘻造設術を施行した。その後、腫瘍摘出術と CDDP の腹腔内投与を行ない、急性腎不全は治癒した。術後56カ月目に2回目の腎後性急性腎不全となったが、経皮的腎瘻造設術を行った。その後出現した後腹膜膿瘍の経皮的エコー下穿刺ドレナージ術、経静脈的な CDDP 治療により急性腎不全は治癒した。現在外来加療中である。S状結腸癌術後の腹膜播種に対して、手術、腹腔内及び経静脈的な CDDP の投与により、腎後性急性腎不全を治療した1例を経験した。

第47回新潟癌治療研究会演題

日時 平成5年7月3日(土)
午後1時30分より6時まで
会場 新潟東映ホテル
2F朱鷺の間

I. 一般演題

1) 肺転移をきたしながら長期に CR を維持している進行神経芽腫の1幼児例

大沢 義弘・岩渕 眞 (新潟大学小児外科)
浅見 恵子・笹崎 義博 (県立がんセンター)
内海 治郎 (新潟病院小児科)

神経芽腫は小児固形腫瘍の中で最も転移をきたし易い腫瘍であり、病期分類でもリンパ節、骨、眼窩、骨髄、肝、皮膚が転移好発部位として独自に標記されている。しかしながら他の腫瘍でよくみられる肺転移は稀であり、